

『緒方洪庵の薬箱（大阪大学所蔵）』由来生薬名から見る実地医療の考察

○島田 佳代子<sup>1</sup>, 道下 雄大<sup>1</sup>, 東 由子<sup>1</sup>, 廣川 和花<sup>2,3</sup>, 村田 路人<sup>3</sup>, 江口 太郎<sup>2</sup>, 高橋 京子<sup>1,2</sup> (<sup>1</sup>阪大院薬, <sup>2</sup>阪大博, <sup>3</sup>阪大院文)

【目的】大阪大学所蔵の『緒方洪庵の薬箱(：薬箱)』は、蘭方医学を取り入れ実地医療に貢献した洪庵の薬物治療法を現代に伝える重要な歴史的資料である。薬箱の薬袋には植物・動物・鉱物由来の59種の生薬が記載されているが、基原植物の研究報告は米田らの6種類のみである。そこで、この生薬名について、国内外の公定書や薬学研究科所蔵の生薬標本を比較検討することで、洪庵の治療観に基づく薬物療法を考察した。【方法】1920～50年代かけて蒐集されたA中尾万三・木村康一標本(57点)、B津村研究所製和漢薬標本(167点)、C独国メルク社製欧州標本(250点)、D藤沢友吉寄贈標本(216点)を比較標本資料とした。また①日本薬局方(：JP)初版～第十五改正第一追補、②第五改正独逸薬局方(蒼虬堂、1911)、③Riley J.原著・小林義直訳「理礼氏薬物学」(1872)、④中尾・木村「漢薬寫真集成」(1930)を薬物書資料として用いた。【結果・考察】生薬標本ならびに薬物書資料群を、A、B、④からなる和漢薬関連標本のI群と、西洋医学で使用されたC、D、②、③のII群に大別した。JPの新規収載生薬について各資料に見られる生薬数を戦前と戦後で比較すると、I群は戦後に、II群では戦前収載分に偏る傾向が認められた。また、JP収載生薬数を版別に分析すると、改正毎にI群関連生薬ではその数が増加し、II群では減少する傾向が見られた。これらより、欧米偏重であったJPが、終戦を転換期として大幅に収載生薬品目が変更され、より日本の医療情勢に則した変化を遂げたことが再確認できた。これに対し、薬箱の生薬は、1～15局を通じ23～28種が収載関連生薬でほぼ一定であった。すなわち、洪庵の薬物治療には漢方と蘭方双方の知識が取り入れられ、日本人の治療に適した医療を展開していたと推察した。